

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年 小説の部 優秀賞

「ハイエナのジエシー」

松陽小学校六年

西川にしかわ

さとみ

その日は急いで草の中にげこんだ。あたしはライオンがその場を過ぎざるのを待つた。ねこみをおそわれて、何頭か死んだ。何頭かはにげて行つた。結果、そこに残つた生きたハイエナはあたしだけだつた。ライオンがいなくなると、あたしはサバンナをさまよつた。何日も何日も。空は星がかかがやいていた。もうダメかな、なんて思った。そしたら、

「だれか、そこにいるの？」

と、声が聞こえた。力をふりしぶって見上げると、少女の顔があつた。少女はおどろいた顔をしていたけれど、すぐにほほ笑んで、あたしをだき上げた。ひさしぶりにだれかにふれて、ねてしまつた。

次の日、目を覚ますと、少女の顔と、それから、やさしそうな女の人の顔があつた。すると、二人はにっこり笑つてから

「私はラーリー。こつちはお母さん。フィオニーっていうのよ。」

と自己紹介をしてくれた。あたしの名前も聞かれたけれど、人間の言葉は話せないし、第一あたしには名前がなかつた。あたしはサバンナのハイエナの「あたし」。だから名前なんてない。こまつていたら

「じゃあ、あなたはジェシー。これからはハイエナのジェシーね。」

と名前をくれた。ジェシー。すてきなひびき。とつてもうれしかつた。

それからは、ラーリーとフィオニーとくらし始めた。毎日が幸せだつた。いつしょに草原を走り回つたり。意地悪でごうまんなアラムに、イタズラをしたり。フィオニーはいつもおいしいごはんをつくつてくれて。ラーリーといつしょに満天の星空を見たりもした。草むらにねそべり、夢の話をしてくれた。いつかあの星を間近で見られるような宇宙飛行士になりたいんだと話してくれた。ラーリーは天体が好きで、星や月の話、それに関するおとぎ話や言い伝えなんかも聞かせてくれた。こんな時間がいつまでも続いたらしいのに。

ラーリーの話を聞いてから、自分は、あたしは何をするべきなんだろうと考えるようになつた。二人のためにお金をかせぐことはできな

いし、何かごうかなものを用意できるわけでもない。だけどたくさんのが恩がある。一人に出会つて生きられて、こうして幸せに過ごすことができる。あたしだけ、何もせずごろごろ過ごす？。そんなのいやだ！。上手く考えられない自分にイライラする。苦しい。苦しいよ。大切な人のために何もできないなんて。ねえ、神様。あたしはどうしたらいいの？。

そう思つた矢先の出来事だつた。ふつうの日だつた。ラーリーとフィオニーは買い物に出かけて、あたしだけで留守番をしていた。少しうとうとして、ねかけたその時。ドン！と大きな音がした。ドアがふつとばされたのだつた。何がいるのかわからぬ。とつさに机の下にかくれた。息を殺して、様子をうかがつた。そこにいたのはライオン。少しばなれた草原でそこら一帯を治めている、オスライオンのドド。おかしい、何でこんな所までドドが来たのかわからぬ。もうすぐラーリーたちが帰つて来てしまう。ドドは強い。体がものすごく大きく、とにかく強い。走るのはそれほど速くはないけど、頭がキレる。まさに百獸の王といつた感じだ。ラーリーとフィオニーは細く、ドドのあのするどいつめでひつかかれたりなんかしたら、ひとたまりもない。おまけに家は病院やけいさつ署とはなれている。どうしよう。だけど、自分はこの時のためにここに来たのではない、と思った。あたしだけじゃ、ドドをたおすことなんて、とうてい無理だ。だけど、少しでもきずをつけることはできる。もちろんこわい。死んでしまうかもしれないから。その時、ラーリーの笑顔がうかんだ。この笑顔を守るためにも、ジェシーは動き出した。ドドの前に立ちはだかつた。ドドはするどい目でこちらをにらみつけた。するどいつめをふり上げた。こわい。でもやるんだ、ジェシー！。ドドの前足をすりぬけ、大きな体にかみついた。ハイエナのあごはすごく強い。当然すごくいたいから、ドドは少しひるんだ。でもすぐに、体をふり、ジェシーをふつ飛ばした。そしてするどいつめでジェシーをひつかいた。いたい。き

ず口から、血がだらだらと流れる。しかし、ジェシーも負けじと対こうする。ドドもさすがにつかれ、人の気配を感じるにげていった。やつた、やつた。成功した。血をはき出しながら、たおれた次のしゆん間、ドサツとドアの方から音がした。そこには落ちた買い物ぶくろと真っ青な顔をしたラーリーがいた。

「ジェシー？」

ふるえた声でラーリーが呼んだ。ラーリーは白いタオルであたしをつづむと、すごい勢いで走り出した。ラーリーの顔はよく見えなかつた。鼻の先にしづくが当たる。しょっぱくて、泣いているんだな、とわかつた。少しづつ苦しくなつてきて。あ、これあたし、死ぬんだなと思つた。手足も上手く動かせなくなつてきて。ラーリーは、小さな病院のドアをつきやぶるように開けて、医者のマディじいさんに、ジェシーを見せた。マディじいさんは険しい顔をして首をふつた。ラーリーの顔には絶望の色があつた。

ねえ、ラーリー。あなたに出会えてあたし、すつごく幸せだつた。愛つて、ものを知つた。町の人にもたくさんお世話になつた。勝気なアロアもいつもおいしいお肉を持ってきてくれた。そんなにさびしくなかつたよ。気付いたら夜になつていて。出会つた時と、夢を話してくれた時と同じ満天の星。だれかがどこかで、言つていた。星に願いをかけたら、叶うんだつて。だから、流した涙だけ、星の願いは強くなる。祈つた分だけ、世界はさらに光り輝く。あたしは先にいくけれど、あなたといつかまた会えるから、その時はたくさんお話ししてね。それまでいい子で待つてるね。たくさん幸せをありがとう。たくさん愛をありがとう。あなたが星にかかるその日まで、笑顔でいてね。ラーリー。

私の家となりには、大事なあの子がねむつていて。買い物に出かけて、帰つたら血を流してたおれてて。本当びつくりした。マディじいさんが言つてた。あの子のきずはおそらくライオンのものだと。

じゃあ、家にライオンが来たの？。どうして？こわい。でもあの時ライオンはいなかつた。きっとせいいつぱいたたかつて、私が来る前に追い返してくれたんだよね。だから私には何もなかつた。まだあの子の死を完全に納得できていし、ふと涙が出る。でも助けてくれた分がんばろう。いつか会えることを星に願つて。また会えた時は、またいつしょに星を見よう。だから、その願いが叶う時まで、私らしく生きるよ。あなたが最後まで守つてくれた、この命で。ね、ジェシー。

